

Elaine Lies 著

佐藤龍男さん(増川地区会長)は子どもの頃に毎年、鬼のようななまはげが自分の家に飛び込んできた時は怖がっていたが、大人になると何世紀も続いてきた地域の伝統がだんだんと消えていくことを悲しんでいた。

佐藤さん(78歳)は「子どもたちや若者はこの町内から姿を消しました。この現状ではなまはげ行事をやることを諦めなければならないのです。」と述べた。なまはげとは大晦日に角ばったお面と藁の衣装を身に着けた男性が「わるい子はいねーが」と叫ぶ来訪者です。

昨年末にユネスコは「男鹿のナマハゲ」を世界文化遺産として登録し、多様な伝統として新たな命を吹き込んだ。しかし、専門家たちは衣装を着た「神々」が村を訪れる類似する伝統文化(来訪神行事)は登録でそれらの文化の維持を保証するものではない。場合によっては、地域外の者や女性を行事に含め伝統維持を手助けするような変革さえ抑制することができるという。

東京にある成城大学の文化史学科の教授である俵木悟氏は次のように述べている。「このユネスコ登録の中で、いくつかの町内は続けることができないかもしれないあるいは現在の形式で続けることができないかもしれないものがある。」

増川町内は過去20年間で人口がわずかに130人にまでに減少した町内であるが、若い人移住者たちのおかげで12年ぶりに伝統的な大晦日のなまはげ行事が復活した。

男鹿市には1989年に120町内のナマハゲをやる町内があったが、2015年には85町内になり、若い男性だけが参加を許可されていても問題は解決しなかった。そこで、いくつかの町内は参加する年齢制限を引き上げたり、若い地域外の人を歓迎した。

移住者の1人の伊藤晴樹さんは日本全国の青年たちを誘い、増川町内の地元の人々と一緒になまはげ行事に参加するアイデアを思い付いた。若い時になまはげを交代でやっていた佐藤さんは「なまはげが若い男性でなければ、ダメだと地域のみんなが同意する。」と、「たぶん、女性が関わったら十分な人手はあるが、そこまでではない。」と言った。

怖い経験は観光客のための宝物

男鹿市役所は昔からユネスコ登録が佐藤の住む増川町内や東京から北へ450kmほど遠く離れた男鹿半島のような場所では、観光ベースの経済成長が非常に必要とされている。経済的にはすでに注目が集まっている。2月上旬に開催された男鹿市のなまはげ柴灯まつりでは2018年の来場者数6100人に対して今年は7600人が集まった。雪に覆われた山から松明を持つなまはげが降りるパレードが行われる祭りは、観光客が増えるに連れ、男鹿市の人口を一時的に3割ほど増加させる。煙が上がった松明を持つなまはげの行列の間にケデからのワラ(なまはげのケデのワラは幸運をもたらすと信じられている。)が落ちるのだろう。

ユネスコ登録に活気付き、大晦日の伝統を復活させるという増川町内の決断は、なまはげのケデの作りためのワラから地元のディスカウントストアから集められた剣の材料までなまはげ行事に使う全てものをかき集めなくてはならなかった。

伊藤さん(27歳)によると、はなまはげ行事復活が増川に住む高齢者の方々の生きる希望になると語った。なまはげ行事をやることで「多く地域の人が「なまはげが私たちを見守っている」と感じている」と言った。

誤解

俵木氏はユネスコ登録は存続に付随するお金はなく、観光客の増加などによる、過度に負荷のかかる観光や、なまはげ本来の持ち主である地域から、主体が変わってしまうリスクもはらむ。

「ユネスコは伝統が変わることを認めているが、ユネスコ登録申請による日本の登録請求にはそうではない」と彼は誤解を招くと言った。「ユネスコ登録のリストに載ったら、「それは昔のやり方ではありません」と言うであろう人々のことを変えようとすれば、伝統的なやり方で続けることを強いられるのではないかと心配する人もいます。」は言った。

今のところ男鹿市ではなまはげをテーマにしたビスケット、判子、さらにはフェイスパックも含めた1年を通して宣伝する全てのものに関心が高まってきている。

これらの作品はいずれも日本の南部出身の24歳の大谷心氏がデザインしたもので、大学進学を機に秋田県に来て、その時になまはげに魅了された。彼女は現在、男鹿市役所で働いている。

なまはげをやっている地区と親しい大谷さんは「友人への敬意と伝統的なやり方に対する地域のみんなの畏敬の念を思って、無理にしようとはしなかった」また、「私の中にはちょっとしたもやもやがありますが、私が参加しなかったことは差別や排他主義ではありません。」「そうしていきたいなというような感じのような感じなだけです。いつか女性も参加できるようになれば、私が彼らの選ぶ1人になると思いますよ。」と言った。

以上